

ユネスコ東アジア地域世界遺産教育国内ワークショップの報告

谷口尚之

(奈良教育大学附属中学校)

田淵五十生

(奈良教育大学社会科教育研究室)

Report on In Country Workshops about World Heritage Education of UNESCO East Asian Region

Naoyuki TANIGUCHI

(Junior High School Attached to Nara University of Education)

Isoo TABUCHI

(Department of Social Studies Education, Nara University of Education)

要旨：2007年3月24日、25日、奈良教育大学で、ユネスコ東アジア地域世界遺産教育国内ワークショップが開催された。ユネスコがいう「東アジア地域」とは、中国（含むマカオ）、韓国、朝鮮民主主義共和国、モンゴル、日本の5カ国である。2006年の11月にソウルで開催された東アジア5ヶ国の世界遺産教育会議で、2007年中に、それぞれの国内で世界遺産教育を推進する国内ワークショップを開催する。その経費として、5000ドルを支援することが決定された。

そのような経緯で、以下の日程表にある5団体が共催して、「ユネスコの提起する教育をどう受けとめるかー『世界遺産教育（WHE）』と『持続可能な開発のための教育（ESD）』を中心にして - 」と題するワークショップが開催され参加者は両日で、延べ260名を超えた。

本稿は、両日討議された概要である。ワークショップの報告書は、2007年5月にユネスコの北京事務所に英文で提出された。けれども、その報告内容はウェブ上で公開されたのみで、日本語の印刷媒体として未刊のままである。両日、何が話し合われ、何が確認されたのかを記録に留めることは、開催に関わった者の責務である。今回のワークショップは、日本におけるユネスコの世界遺産教育のキックオフ的な会議であり、資料的な価値が高くより多くの方々の目に触れることを願い、本誌に掲載するものである。

キーワード：世界遺産教育 World Heritage Education 持続可能な開発のための教育 ESD (Education for Sustainable Development) ユネスコ (国連教育科学文化機構) UNESCO

1. ワークショップの日程と開催の趣旨

両日のスケジュールは及び発表者は、次ページ示す日程表の通りである。先ず、実行委員長の田淵によって開催の趣旨が以下のように提案された。

平和教育、人権教育、環境教育、開発教育、文化の多様性の尊重など、ユネスコは、ユネスコ協同学校計画 (ASP Net) を通して、様々な教育課題に取り組んでいる。そして、最近では、「世界遺産教育 (World Heritage Education :WHE)」と「持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development: ESD)」の推進を呼びかけている。けれども、日本の教育現場では、残念ながら「ESD=What?」、「世界遺

産教育って何か」という状況である。

世界にはユネスコ協同学校 (ASP) が、現在、約7900校もあるが、日本では20数校しか存在しない。世界遺産教育が、すでに10年以上前からユネスコで論議されていながら、日本での取り組みが進展しない理由の一つが、日本におけるユネスコ協同学校の量的な少なさである。しかも、全ての加盟校が活発に活動しているわけではない。

そのような状況を踏まえて、2004年に、日本ASPネットワークが設立された。そして、過去3回、それぞれの教育実践を持ち寄って、お互いに教育実践の交流を図ってきた。そして、今回、第4回目の協議会を開催することになった。

2006年11月、東アジアASPネットワーク世界遺産教育の推進会議がソウルで開催され、それぞれの国内において「ESDを視野にいれたWHE」のワークショップを開催することが提起された。そこで、東アジアASPネットワークの「世界遺産教育国内ワークショップ」と、「第4回ASPネットワーク協議会」を、結び付けて同時に奈良教育大学で開催することになった。

パリのユネスコ本部よりASPの責任者、国際交流コーディネーターのニーデルマイヤー博士を招聘し、世界のASPネットワークを通じたユネスコ教育の動向について理解を深めることにした。

「忙しい教育現場に、さらに新しい課題を持ち込むのか」という、怨嗟の声が聞こえてきそうなのが、日本の教育現場の実態である。けれども、ESDを推進しようとする理念は、校種によらず、あらゆる学校現場の、様々な場面で実践が可能で、しかも「何のための教育なのか」を問いかける「教育の原点」に根ざす課題である。世界遺産教育を切り口にして、次の4点を明らかにするワークショップにしたいと願っている。

第一は、ユネスコ協同学校とはどのようなものなのか、その組織的な実態を知らせ、1校でも加盟希望校を増やしたい。

第二は、そもそも「世界遺産」とは何かについて理解を深めたい。さらに「世界遺産教育」をどう推進したらいいのか、原点に立ち返って学ぶ機会にしたい。

第三は、ESDとは何か、またどう推進すればいいのか。専門家の理論に触れ、先駆的な教育実践から学ぶ機会にしたい。

第四は、ESDを視野に入れた世界遺産教育をどのように展開するか、その理論に触れると共に、世界の先進的な実践からヒントを得たい。

以上の課題を明らかにすることは、ユネスコ教育の精神を日本の教育現場にどう反映させるのか、ESDや世界遺産を社会科や理科、「総合的な学習の時間」などの教科学習とどう結びつけるのヒントになるものと確信している。

2. シンポジウム基調講演：「ESDを視野に入れた世界遺産教育を推進するASP」

講演の要旨：世界遺産と持続可能な開発にかかわる概念と問題点を教育分野に導入することにおいて、ユネスコ協同学校はパイオニアである。ユネスコ協同学校は“*World Heritage in Young Hands*”(教育用キット)を通して、教員トレーニング・セッションや世界遺産青年会議を開催する等、世界遺産を教育に導入している。さらに、ASP校の多くはDESDの枠組みの中でパイロット・プロジェクトを実行している。このプロジェクトの多くがESDと世界遺産を組み合わせたもの



図1 ニーデルマイヤー博士の基調講演

である。以下、2つの取り組みを紹介された。

1つは、UNESCO/ASP Great Volga River Routeで、ボルガ川流域の16カ国の協同学校の生徒がICTを利用して行っている。このプロジェクトは世界遺産と生物圏の保護を目的としたもので、ESDを推進し、世界的には教育開発を援助するものである。

2つは、UNESCO/ASP Western Mediterranean Projectは北アフリカと南ヨーロッパの2大陸9カ国の学校が協同して行っている。地中海の水問題および地中海沿岸の国々の文化交流の調査のプロジェクトである。

3. パネルディスカッション

(1) 世界遺産への理解から真の観光をめざして

奈良教育大学副学長 淡野明彦

1. 世界遺産の登録と関心の高まり

1772年に開催されたユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」(通称：世界遺産条約)に基づき、1978年にドイツのアーヘン大聖堂など12物件が世界最初の世界遺産として登録された。それ以降、スペインの38件を最多に、2006年までに830件(自然遺産162、文化遺産644、複合遺産24)もの登録がおこなわれている。人々の世界遺産に対する関心も急速に高まり、エージェントはパッキングツアーとしての商品化を競っている状況である。世界遺産への登録は優れた物件に単にお墨付きを与えようとするのではなく、人類の文化や地球の自然を地球の宝物として滅失や破壊から守り、未来へと引き継いでいく高い理想の実現への試みである。多数の世界遺産は大切に守られているものの、早くも存続の危機にある物件もみられる。これらは「危機にさらされている世界遺産リスト(危機遺産リスト)」に登録され、当該物件を保有する国に対して是正計画が提示され、また国際社会が協力して財政援助や技術援助をおこない、速やかな回復を図ることになっている。2006年8月時点では「エルサレムの旧市街とその城壁(文化遺産)」

インドの「マナス野生動物保護区（自然遺産）」など31物件もがリストアップされている。危機にさらされる理由として、武力紛争、自然災害、大規模工事、都市化、商業的密猟、管理体制の不備と並んで観光開発があげられる。先のエルサレムの物件やコンゴ民主共和国の「カフジ・ピエガ国立公園」などが観光開発による客の流入による影響を受けている。

2. 環境破壊としての観光

観光は本来的には優れた自然のおよび人為的景観を訪れ、その素晴らしさを楽しむものである。そのためには対象となる景観は、常に優れた状態が維持されなければならない。観光客の立ち入りに便利のように道路を開いたり、ホテルなどの施設を新しく造ることは、両刃の剣である。優れた景観を見にやってきたのに、醜悪な景観を目の前にする場合がある。観光による経済的利益のあくなき追求や、客の過剰な欲望へのみだりに迎合するあまりに、適正な観光地の管理を怠れば、景観の連鎖的な破壊へと進んでいく。危機リストにはリストアップされていない世界遺産であっても、負のスパイラルへと向かう危機は常にある。その好例として2005年に自然遺産に登録されたばかりの「知床」が指摘されており、急激な観光客の増加は道路混雑を常態化させ、排気ガスによる大気の汚染、植物や動物の自然的生態への悪影響などを生じさせている。優れた景観を見ることによって心をいやすという観光のもつ効果は大いに肯定されるべきであるが、負の面に対する評価に真正面から取り組まなければならない。

3. 環境教育としての観光教育 - 世界遺産を教材として

観光として世界遺産を訪れることは、すなわち世界遺産の存在を正しく理解し、保全・保護への深い認識をもつことである。環境教育の具体例として観光の意義について、世界遺産を教材とした意図的な教育が必要である。

(2) 世界遺産教育と持続可能な開発のための教育とアースシステム教育

国立教育政策研究所 五島政一

世界遺産教育 (World Heritage Education (WHE)) は、世界遺産リストに登録された文化・自然遺産の、崇高な普遍的価値について学習すること、ユネスコの世界遺産条約によって保護される登録遺産の保全に役立つ新しい能力を身に付けること、地方の、国の、そして世界の遺産を現在と未来の世代のために守る気持ちを生涯を通じて持ち続けるように育てること、世界の文化と自然が有する驚くほどの多様性を維持するために国際協力を通じて重要な役割を果たすことを目指しています。

持続可能な開発のための教育 (Education for sustainable development (ESD)) の目標は、すべて

の人が質の高い教育の恩恵を享受し、また、持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれ、環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすことです。世代間の公平、地域間の公平、男女間の平等、社会的寛容、貧困撲滅、環境の保全と回復、天然資源の保全、公正で平和な社会などESDで取り組むべき課題は多義にわたります。ESDで目指すべきは、個々人が単に、これらについての知識を網羅的に得ることではなく、「地球的視野で考え、様々な課題を自らの問題として捉え、身近な所から取り組み (Think globally, act locally) 持続可能な社会作りの担い手となる」よう個々人を育成し、意識と行動を変革することです。このような個々人の取組がつながることにより、持続可能な地域づくり、国づくり、世界づくりとして発展することが可能となります。ESDにおいては、問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方と重視して体系的な思考力 (Systems thinking) を育むこと、批判力を重視して代替案の思考力 (Critical thinking) を育むこと、データや情報を分析する能力、コミュニケーション能力の向上を重視します。また、人間尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重といった持続可能な開発に関する価値観を培うことも重要です。ESDは、学際性と総合性、価値観に牽引された取組、批判的思考と問題解決、多様な方法、参加型意思決定、地域社会との関連性に基づいて行われます。

WHEとESDを融合することで、世界遺産についての教育や世界遺産のための教育だけでなく、世界遺産を通して持続可能な開発や社会を創造する教育を構築することが可能です。それは、自分たちのアイデンティティ、地域の自然・社会・文化などの環境のアイデンティティなどと世界遺産を繋ぐ教育となります。それは地域と世界を繋ぐ教育であり、異文化理解や国際理解、地域に基づいた地球規模の展望を身に付けることに繋がるものです。ESDは、また、子どもが実体験できる地域に根ざした教育の延長として、世界遺産教育を位置付けることのできる act locally and think globally with future perspectives な教育を創造することが可能です。

(3) 「世界遺産教育」と「ESD」の関わりについて

奈良県立法隆寺国際高等学校 祐岡武志

私の勤務する奈良県立法隆寺国際高等学校には「世界遺産学」という学校設定科目があります。本校には「歴史文化科」という専門学科があるためです。しかし、「世界遺産」を教育のテーマとして取り扱うことは、特別な教科・科目でなくても可能であると思います。各校種の日々の授業の中で行われてきたことが、「世界遺産教育」や「ESD」につながることを私は強

調したいのです。

私は「世界遺産学」の授業のために、集中的に世界遺産の教材開発をするなかで、世界遺産教育は大きく2つに分けることができると考えるようになりました。

世界遺産についての教育 (Education about World Heritage)

世界遺産を通しての教育 (Education through World Heritage)

「世界遺産についての教育」は、文字通り、世界遺産そのものに関する知識や理解を深めさせることをいいます。世界遺産の重要性や特殊性について正確に学ぶことで、世界遺産の価値や存在意義についての理解を深めることが目的です。その結果、学習者は世界遺産以外の身近な地域の遺産や文化財についても、興味・関心を高め、それらについての学習に取り組みせる契機となります。

「世界遺産を通しての教育」は、世界遺産を学ぶことで、他の教育分野に発展させていくことをいいます。世界遺産を事例にして、国際理解を深めたり、平和や人権の尊さを自覚させたり、環境の保全の意識を促したり、歴史や文化の理解を深めたりすることが目的です。従って、「世界遺産を通しての教育」によって、国際理解教育、平和教育、人権教育、環境教育、歴史教育などと関連付けながら、学習を展開することが可能となります。このことは、世界遺産教育が、今日の「世界的な諸問題」を取り扱うことを意味します。

「世界的な諸問題」は「異文化理解」、「人権」、「環境」とともに、ユネスコ協同学校ネットワーク (ASPnet) の学習テーマとして取り上げられています。また、「世界的な諸問題」を学習することは、ユネスコが提唱している「持続可能な開発のための教育 = ESD」と関連します。こうして、世界遺産を通して「世界的な諸問題」を学習することは、「ESD」に発展・展開していくことになるのです。

(4) 奈良NPOセンター「もうひとつの学び舎」

奈良NPOセンター事務局 仲川順子

この10年で、NPOやボランティアといった、住民自ら地域課題の解決に主体的に関わろうとする動きが急速に社会に浸透している。しかし一方、そういった活動やテーマに全く無関心な市民も多く存在する。当センターでは2002年の設立以来、既にNPO活動に取り組む人たちへの支援と同時に、これから関わろうとする層 = 潜在的市民層へのアプローチを重視し、市民教育事業に取り組んできた。その中核である「もうひとつの学び舎事業」では地域の子どもの対象に、自分たちの暮らす社会や環境への関心を育てようと、歴史や自然、文化などをテーマにした体験プログラムに取り組んでいる。

毎年述べ約1,000名が参加する本事業では、子どもた

ちの主体性や創造性を活かすことを目標に掲げており（「子どもの参画」）、大人は専ら支援者として側面からサポートすることを心がけている。また地域のNPOや専門家といった「学びの資源」を掘り起こし、コーディネートすることによって地域の教育力を総合的に高めることをめざしている。

このところ学校教育改革に高い関心が集まっている。しかし、教科カリキュラムの量的増減や教員資格の得失が議論されることはあっても、一人の人間が成長し社会に巣立つまでに、どのような経験や学びが必要かという包括的かつ、根本的な議論がなされる機会があまりない。また教育の目的自体が「個人資産」としてのキャリア形成指向が強く、地球の課題の解決のような公益に資する目的意識が希薄な印象を受ける。私たちは身近な歴史文化遺産や自然遺産へのアプローチの中から、子ども自身が学びの目的や意欲を発見し、自ら主体となってコミュニティ再構築や持続可能な社会づくりに取り組む人材となることを願っている。

(5) 世界遺産教室

ACCU奈良事務所次長 太郎田 明憲

現在日本には世界遺産として13件が登録されているが、そのうちの3件は奈良県内に所在するものである。高校の授業の中で世界遺産に詳しい講師を招き、高校生に自分たちの身近にある世界遺産や外国の世界遺産についての解説および世界遺産条約ができた背景や目的を教え、高校生が文化遺産や文化財保護の重要性を学び、また郷土の歴史について再認識するきっかけとする。本事業は平成17年度から奈良県及び奈良市からの補助金を活用して始めたものである。

活動概要は以下の通りである。概要

平成17年度（県内4高校/240名）

平成18年度（県内6高校/360名）

- ・世界遺産条約が出来た背景と目的
- ・県内の世界遺産を始め国内外の世界遺産の紹介並びに解説
- ・世界遺産の種類
- ・世界遺産の登録基準等々
- ・生徒との質疑応答

4. WHE実践報告

(1) 「世界遺産で考えるわたしのこころのふるさと」の授業実践から

広島県大竹市立栗谷中学校 小嶋祐何郎

1. 実践の視点 ~ユネスコの提起する教育を日本の学校現場でどう普及するのか~

昨今の急激な教育改革の波の中でたくさんの教育実践に追われる毎日、そして2極化していく子どもたち・学校現場はどこも悲鳴に近い状況である。その

ような中で、世界の教育の潮流となったESDやWHEの取り組みをどのように進めていくのかが問われている。

わたしたちの学校は、中国山地の過疎地に位置する小さな名も無い学校である。そんな学校での実践をもとに、新しい日本の学校教育の方向性を参加者の方々と探っていくこと、それがこの報告に課せられた役割であると考えます。

現在の学校現場でESDやWHEの理念に基づく実践を進めていくために必要だと思うことが3つある。まず第1に最も大切なこととして、新たな教育内容を現場に持ち込むとらえるのではなく、これまでの実践とESDやWHEの理念をつなぐという視点に立つことである。第2に、そのような視点に立って学校教育をとらえ直してみることが、これからの学校のあり方を考える重要な役割を果たすということである。そして第3は、そのような新しい学校教育が、一人一人の子どもと社会をつなぐ役目を担わされているということ、そしてそのためにわたしたち教師は何をなすべきかということ、すなわち「learning to be」とは、教師自身に投げかけられた言葉ではないのか、ということである。

2. 実践の概要 ~ 保小中連携学習を通して ~

これまでの教育実践とESDの理念をつなぐもの、それは「いのちの学び」である。わたしたちの地域では、「(未来のいのちをも含めた)すべてのいのちとの共生」を理念に、「生活科・総合的な学習の時間」を中心に、保小中連携学習を推進している。今回報告する実践も、中3と小5・6との連携学習として計画し、地域を見つめ、地域の未来を創りだすことをめざして取り組んだ。

3. 実践を通して

ESDの理念を今日の学校教育の中に生かすためのキーワードは「いのちのつながり」である。そしてその実践は、「競争社会」から「共創社会」へと社会変革を促す学校教育の役割を考える真摯な、しかし非常に歴史的意義を持つ営みである。一人一人の人間の成長と社会の変革をつなぐ教育の役割が問われている。

(2) 英語ディスカッション「私たちにできること」

奈良女子大学附属中等教育学校教諭 南 美佐江

1. 英語科カリキュラムとの関係

本校4年生(高校1年)の英語科目 Integrated Englishでは、theme-based instructionにより、トピックを中心に4技能(読む、書く、聞く、話す)の統合的な習得を目指している。

この実践は、「Responsibility in the Community」の授業として行った。「ゴミ問題」、「観光客が原因となる環境汚染」などの教材を扱った後、「地域の中での自分たちの責任」について考えた。奈良県は3つの世界遺産を有するが、それについての生徒たちの認識は

高くない。自分たちの郷土について考え、「観光」と「保護」の両面から理解を深め、奈良の発展のために自分たちができることを考える機会とした。

前ユニットで扱ったトピック「Responsibility in the Relationships」から視野を広げて考える授業を心がけた。次のユニット「Responsibility in the World」へとつなげるために、「世界遺産」を扱うのは効果的であった。

2. 実践の概要

(1) 世界遺産とは? ...世界遺産登録基準(Reading/Vocabulary)

ユネスコで示されている世界遺産登録基準と、「自分たちの地域で大切にしたいもの」のディスカッションの際に考えた理由を比較して考察する。「世界遺産」について語るのに必要な語彙を習得する。

(2) 奈良の世界遺産を確認する...世界遺産基準に照らして、意義を考える。(Discussion)

奈良の三つの世界遺産はどの基準に当てはまるのか、グループ・ディスカッションを通して、その意義を確認する。

(3) 他の世界遺産の問題点を考える...都市化、観光化に関する教材を使って(Reading)

他の世界遺産で起こっている問題(白川郷の観光化、原爆ドーム近くのマニション建設等)について、グループでディスカッションの後、危機遺産についてのテキスト(ケルンの大聖堂についての新聞記事)を読み、奈良の世界遺産に起こりうる問題について考える。

(4) ディベート「奈良の観光化を進めるべきである。」(Debate)

「奈良の観光化を進めるべきである」という命題についてディベートを行い、観光化のメリット、デメリットの理解を深める。

(5) 奈良の世界遺産のあり方について今後のあり方を議論する(Discussion)

(4)で見つけた、観光化のメリット、デメリットから、最善の方向性を探る

(6)「地域のために自分たちにできること、自分たちのすべきこと」(Writing)

3. 教科学習の中での世界遺産教育

今回、英語科の授業の中で「世界遺産」をテーマに取り上げた。他の教科においても「世界遺産」を材料に授業を展開することは十分可能である。各教科が連携し「世界遺産教育」に取り組むことで、ESDの発展・展開につながるものと期待している。

5. ディスカッション

(1) ASP(ユネスコ協同学校)の発展に向けて

~世界遺産教育とAPSの今後の役割について~

東京都江東区立東雲小学校 主幹 石田好広

1. 江東区立東雲小学校の特色

国際的な施設の多い地域の特性を生かして、国際理解教育を中心にESDの研究・実践に取り組んでいる。効果的な授業が実践できるように、「ESDカレンダー」（年間学習計画）を作成し、意図的・計画的な実践を心がけている。

2. WHE（世界遺産教育）

WHEについては、4年生のカリキュラムの中に位置づけている。～4年生「わたしたちのたからもの 世界のたからもの」（総合33時間）

子どもたちにとって、世界遺産はとても魅力的な学習材であり、とても熱心に調べ、発表していた。世界のたからもの愛し、それを守りたいという心情が芽生えた子もいた。さらに、世界遺産の学習から、地域のたからもの学習へ発展させることにより、自分たちの地域を見つめ直し、地域を愛する心情も育てることができた。また、この学習をきっかけに、学校と地域の施設との連携が深まった。

3. 今後のユネスコ協同学校の発展

ユネスコ協同学校に登録することは、保護者や地域に学校の特色を示すととてもよい方法である。外国からのユネスコ関係の客人が視察に来るようになり、子どもたちが世界に目を向けたり、外国の方と交流したりするよい機会になっている。子どもたちのプライドが高まり、保護者や地域の方々から、高い評価を得ることができた。

21世紀のグローバルな社会に生きる子どもたちを育てるために、国際理解教育やESDは不可欠であり、ユネスコ協同学校が、それらの教育を推進するリーダーとして積極的な研究や実践すべきであると考え。また、ユネスコ協同学校に勤務していなくても、国際理解教育やESDに深く関心をもって授業実践している多くの教員がいる。その多くの教員の考えや実践の情報を広く拾い上げ、整理し発信する役割も果たすべきだと考える。

(2) 大阪府立北淀高等学校の国際理解教育

大阪府立北淀高等学校教諭 大島和弘

本校の国際理解教育は、生徒が自尊感情を回復し、かけがえない存在である自己を成長させる意欲を育てることを基本としている。さらに、社会に共生するひとりの人間としての自己に気づき、社会における当事者としての自己を育てることをめざしている。本校には、さまざまな理由によって学習から「疎外」され、自らの可能性と向かい合う機会を失ってきた生徒も層として存在する。本校では、そのような生徒たちが、「自己理解」と「他者理解」の学習を通じて、自己を肯定し、価値ある存在としての自分に自信をもって社会と関わることができるように、さまざまな学習機会を提供してきた。国際理解教育は、その学習機会の重

要な一つとして位置づけられている。

上記のような目標を達成するためには、他者との交流を通じて学ぶ機会が重要であると考え、学校外の団体や個人と連携して学習を進めることができるように計画している。日本で学ぶ留学生や研修員、特にアジア諸国の人々、また国際協力の場で活躍した人々などとの出会い、対話や参加型学習を通じた交流は、多様な文化・環境の中で生きる人々への共感的理解が深まる。このような出会いやふれあいを通じて、自分はどうのような存在であるか、自分には何ができるかを考えて、生徒たちは自らの行動へと結び付けていく。本校の国際理解教育の特色は、このような学習の過程を重視するところにあると考える。

また、2004年3月にユネスコ協同学校に加盟したことで、ユネスコ「国際教育」を本校の国際理解教育の柱として再確認した。『人権』の尊重と『共生』の態度の育成を大切にしてきた本校の歴史と現状をふまえ、異文化への理解を深め、貧困、識字、平和、環境問題などの世界的な問題を学ぶ中で、さらに人権意識を高め、「新しい自分」「世界の中の自分」を発見できるように学習を進めている。実践の概要は以下の通り。

1. 留学生・JICA研修員との交流・・・毎年JICA研修員グループを本校に招き、グループ別の文化交流を中心に実施している。また、最近では大阪大学・大阪国際大学より留学生を招き、小グループでのお互いの生活の紹介を中心に交流を実施している。

2. 青年海外協力隊経験者との連携による講演・ワークショップ・・・青年海外協力協会（JOCA）との連携で、経験者による講演や、世界の様々な地域の人々の生活を共感的に学ぶワークショップ『地球生活体験』を継続して実施している。

3. 識字の問題・・・日本の識字運動の歴史を学び、識字と人間の尊厳の問題を考える。また、現在の世界の識字の問題を学び、世界の様々な問題を考えるきっかけとし、また自らが現在学んでいることの意義を改めて確認する。

4. 平和学習・・・沖縄修学旅行に向けて、アジア・太平洋戦争における沖縄戦の惨禍や、戦後の沖縄に課せられた「基地」の問題を学び、平和を尊ぶ精神や、他者の立場に立って問題解決に取り組む姿勢を養う。

5. 人権の問題・・・すべての教育活動の基本方針として「人権を学ぶ」ことを置き、アクティビティを通して様々な人権問題を考えさせている。とりわけ、お互いの違いを認め合う仲間作りに力を入れている。

6. 課外活動・・・ユネスコクラブの「寺子屋運動」やリサイクル、ボランティア部の障害児との交流活動、生物部のピオトープ、生徒会がよびかけている近隣の「公園掃除」等、活発に活動中。大阪府の「こころの再生、府民運動」にも協力した。

7. 大阪ASP3校、アジア5カ国のユネスコ協同学校

との連携

6. 第1日の総括

目白大学教授 多田孝志

7. ASP活動の報告

第2日は以下の組織の取り組みが報告された。紙幅の関係上b、最後に行われた奈良市教育委員会の中澤静男氏の報告以外、タイトルと発表者のみを報告する。

(1) ユネスコ協同学校をめぐる現状と課題

～ESD及び世界遺産教育を中心に～

日本ユネスコ国内委員会事務局 小川真由美

(2) 世界遺産学習キット

「ユネスコ世界遺産隊員パック」

日本ユネスコ協会連盟教育文化事業部長 寺尾明人

(3) 新たなる21世紀の教育実践を求めて

～ニュージーランドの多文化共生教育と世界遺産を視察して～

目白大学助教授 中山博夫

(4) 「未来へつなぐ世界遺産と奈良」の取り組み

奈良市教育委員会学校教育課指導主事 中澤静男

1. はじめに

平成10年に東大寺、興福寺等の8遺産群全体で物語っている奈良の歴史や文化の特質が評価され、「古都奈良の文化財」として世界遺産リストへ登録された。このような貴重な文化財を身近に感じることができることは奈良市の特色のひとつである。世界遺産等の文化財の教材化を通して、奈良の自然、文化を学び、さまざまな人々とのふれあいの中から奈良のよさを発見し、奈良に誇りを感じることができるような、奈良らしい学習の充実を図ることを目的とする。

2. これまでの取組の成果と課題

平成12年3月に世界遺産学習資料「世界遺産のあるまち奈良」を作成すると共に、世界遺産に親しむことを目的に小学校5年生を対象にNPOの観光ボランティアガイドの協力のもと、現地見学を主体とした世界遺産学習を行ってきた。

【成果】

世界遺産を教材化し、世界遺産を学ぶ契機作り
NPOとの連携による学習活動の充実と改良

【課題】

知識理解 学び方・見方・考え方・態度を養う学習

学習のスタートとしての世界遺産

3. これからの奈良の世界遺産学習

世界遺産があるまちの学習モデルとなる新しい世界

遺産学習の構築に向けた5つの視点

NPOとの連携による子ども主体の学習活動と「人」との出会い・共感的理解

奈良国立博物館との連携による文化財の価値についての理解の促進と「人」との出会い・共感的理解

世界遺産を歴史的及び地理的に捉え直し、価値を再発見したり、地域社会とのつながりを考えたりする学習

マクロな見方・自己の生活とつなぐとらえ方

伝統文化・文化財を尊重する態度形成

「こと・もの」「人」への感動体験による学習意欲の向上と発展

世界遺産に関わる人物への共感的理解より、見方・考え方や規範意識を育てる学習

世界遺産を切り口とした、持続可能な開発のための教育への展開

・世界遺産やそれに関わる人物の働きの類似点より「国際理解教育」へ

・世界遺産に関連した美術・芸術・音楽の比較より「国際理解教育」へ

・世界遺産の保護やそこでの生物の多様性の重要性より「環境教育」へ

・「負の世界遺産」・「危機にさらされている世界遺産」との比較より「平和教育」へ

8. 分科会

当日、二つの分科会がもたれた。一つは、「ESDをどう推進するか」というテーマで、国立教育政策研究所の五島政一氏の理論的な報告と、広島大学附属中・高等学校教諭の藤原隆範氏の教育現場に則した実践的な報告が行われた。

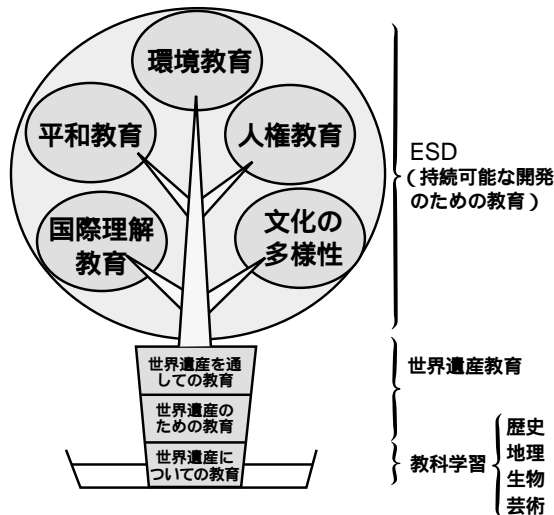
もう一つのテーマは、「世界遺産教育をどう推進するか」というテーマで、奈良教育大学の田淵五十生氏の理論的な報告と、長年に亘って地域の文化遺産へのフィールドワークを行っている奈良教育大学附属中学校教諭の谷口尚之氏の実践的な報告が行われた。以下、その要約のみを記す。」

1 WHEをどう推進するか～ESDを視野に入れて

奈良教育大学 田淵五十生

世界遺産教育は、単なる世界遺産についての知識を与えるものではない。世界遺産の価値に気づき、大切に保存しようとする態度、未来に伝える義務があるという責任感、そのために何ができるかという実践的なスキルなど、トータルな教育を目指している。その意味では、「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development=ESD）」は共通している。

世界遺産教育は、次のようにサブカテゴリー化する



WHEとESDの概念図

と理解しやすい

- 1) 世界遺産についての教育
Education about World Heritage
- 2) 世界遺産のための教育
Education for World Heritage
- 3) 世界遺産を通しての教育
Education through World Heritage

地域の世界遺産を通して文化の多様性に気づかせる国際理解教育とリンケージした学習、他地域の世界遺産（ヒロシマの原爆ドーム）へのスタディーツアーを通して平和の尊さに気づかせる平和教育にリンケージする学習が考えられる。前者では、奈良県下の仏教文化をシルクロードの文化と比較して、共通性と個別性を確認する実践である。後者は「ヒロシマ」の慰霊碑を訪れて被爆者たちにインタビューする実践などが考えられる。

また、世界遺産の価値に気づかせ、世界遺産への態度変容に有益な方法が、危機遺産に指定された世界遺産を教材化することである。世界遺産教育は、世界遺産がない地域でも実践である。地域にある優れた文化遺産や美しい自然遺産を探し出し、地域へのアイデンティティを育む教育も世界遺産教育の一つのあり方である。

2 地域の文化遺産へのフィールドワーク「奈良めぐり」を通して

奈良教育大学附属中学校教諭 谷口尚之

1. 附属中学校の「奈良めぐり」の実践で大切にできたこと

奈良県内や県外の自然や産業、人々のくらしなどの様子や地域の課題などを直接見聞させ、地域の発展につくそうとする態度を育てる。

奈良県内をはじめ、京都や大阪などの主な文化財を直接見聞させ、文化財に対する理解と関心を深めさせるとともに、日本史や世界史との関連をつかませる。

文化財保存の現状を直接見聞させ、文化財を愛護し尊重する態度を育てるとともに、新しい国民文化を創造しようとする能力や態度を養う。

地域の自然や産業、文化財などを研究したり発表したりする能力を養うとともに、研究や見学などを通じて責任感や協調性を養う。

学期（4月後半）の見学先	
第1学年	平城宮跡・資料館・佐紀盾列古墳群・法華寺・不退寺など奈良市北部の寺社など
第2学年	法隆寺・中宮寺・法起寺・法輪寺など斑鳩の里の寺院とその文化財
第3学年	薬師寺・唐招提寺など西の京の寺院・大和郡山城・垂仁陵古墳・西大寺など
3学期（1月後半）の見学先	
第1学年	東大寺...南大門・大仏殿・三月堂・二月堂・戒壇院・正倉院など
第2学年	興福寺...五重塔・東金堂・国宝館など。奈良町...元興寺・奈良墨工場など

2. 世界遺産教育の要点

～"World Heritage in Young Hands" Project に取り組んで

世界遺産についての教育

「ユネスコ世界遺産条約」についての知識や理解を深める

- ・ユネスコの理念（＝世界遺産条約の理念の根底をなすもの）をつかませる
- ・世界遺産条約の目的（＝条約に登録することの意味や必要性）を知らせる
- ・3種類の世界遺産（＝自然・文化・複合）と各登録基準について知らせる
- ・世界各地の世界遺産の概要を知らせる
- ・日本の世界遺産について知らせる
- ・どこに、どのような“危機遺産”があるのかについて知らせる

地域（奈良）にある世界遺産についての知識や理解を深める

- ・どこに、どのような世界遺産があるのか
- ・どの基準に照合して登録されたのか
- ・事前学習後、現地見学を実施し、ワークシート等で課題学習をさせる それぞれの文化遺産の“国境と世代を超えた宝物”としての価値を知らせるとともに、

それらを保護し、継承していくことへの責任を自覚させる。

世界遺産を通しての教育

他地域の文化遺産との比較を通して、文化の共通性と個性に気づかせる

・奈良の世界遺産（諸仏の造形や建築物各所の意匠など）と朝鮮・中国・シルクロード各地の世界遺産等との比較を通して、文化交流の意義や文化の融合、重層性に気づかせる。

世界遺産を次代に継承するために大切なことは？という問い

- ・それぞれの世界遺産が持つ、普遍的な価値を学ばせ、理解させること。
- ・世界遺産の継承を“妨げるもの”とは何かを考察させる 具体的には、戦争や紛争、偏った民族主義、異質な他者を受容しようとしぬい考え、環境の破壊や汚染、無秩序な開発や観光化、無関心など
- ・それら“妨げるもの”とどう向き合い、克服していくか～個人として、仲間と協同して、地域で、それぞれの国で、国際的な連帯として～について、自らの意見を表明し能動的な行動につなぐ。

9. おわりに

如上のように熱心な討議が行われ、最後に世界遺産「古都奈良の文化財」に指定された二つのサイトへのフィールドワークが行われてワークショップの全てのプログラムが終了した。一つのコースは、「東大寺とその周辺」で同行解説を奈良教育大学助教授の大山明彦氏が担当して、南大門 大仏殿（金堂） 鐘楼 法華堂（三月堂） 二月堂 戒壇院戒壇堂を巡るものであった。

南大門では、鎌倉時代を代表する仏師運慶ほかの手になる『金剛力士像』、また中国宋時代の工人による石造の獅子像を、大仏殿では、ご本尊の大仏（盧遮那仏）はもちろん、天平の豊かな意匠を留める八角燈籠、そして法華堂ご本尊の不空羂索観音像をはじめとする諸尊像を、またさらに戒壇院戒壇堂の四天王像と、我が国を代表する奈良時代の仏像などを拝観した。

もう一つのコースは「元興寺と興福寺」で、奈良町元興寺境内 興福寺境内（五重塔）を巡るもので、奈良教育大学助教授 山岸公基氏が同行解説を担当した。

参加者は歴史的な町並みを散策し、古都奈良の風情を楽しんだ。また、平素は非公開である興福寺五重塔に特別のご厚意で入堂させていただく機会に恵まれた。

フィールドワーク終了後、振り返りの会を持ったが、「本物に触れ、その背後にある意味についての知識が加わることを通して、世界遺産の価値がより深く理解でき、世界遺産を次世代に無傷のまま伝えなければな

らないという態度が育成されるのではないか」という意見が多く参加者から寄せられた。

2日間に亘るワークショップから、体験を伴う現地学習を通して、自分たちの地域の文化遺産や自然景観を見直すことの重要性を、われわれは確認することができた。最後にユネスコ国内委員会、ユネスコ協会連盟、ACCUの方々にお礼を申し上げたい。特に、パリのユネスコ本部のニーデルマイヤー博士に感謝している。含蓄に富む講演とコメントがあってワークショップを成功裏に終えることができた。また、博士の招聘に尽力してくださった小川真由美氏をはじめとするユネスコ国内委員会の方々へ深甚の感謝の意を表したい。

日程【3月24日(土)】

時 間	研 修 の 内 容
12:30~	開会行事 主催者あいさつ ・柳澤保徳氏(奈良教育大学学長) ・竹縄柱二氏(ユネスコ国内委員会事務局/大臣官房国際課企画調査室長) ・山本忠尚氏((財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所所長) ・米田伸次氏(日本ASPネットワーク代表/日本ユネスコ協会連盟理事・国際教育委員長)
12:50~ 14:10 14:20~ 16:00	シンポジウム「世界遺産教育とESDへの取り組みをめぐって」 基調講演「ASPと世界遺産/ESD」 ニーデルマイヤー氏(ユネスコ本部課長) パネルディスカッション [コーディネーター] 田淵五十生氏(実行委員長) [パネラー] ・ニーデルマイヤー氏 ・五島政一氏(国立教育政策研究所総括研究官) ・淡野明彦氏(奈良教育大学副学長) ・祐岡武志氏(奈良県立法隆寺国際高校教諭) ・仲川順子氏(奈良NPOセンター) ・太郎田明憲氏((財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所次長)
16:10~ 17:55	ASP(ユネスコ協同学校)の発展に向けて [コーディネーター] 多田孝志氏(目白大学教授) WHE実践報告 小嶋祐伺郎氏(広島県大竹市立栗谷中学校教諭) 南美佐江氏(奈良女子大学附属中等教育学校教諭)・生徒発表 [指定討論者] 石田好広氏(東京都江東区立東雲小学校教諭) 大島弘和氏(大阪府立北淀高校教諭)

【3月25日(日)】

時 間	研 修 の 内 容
9:30~ 10:40	ASP活動報告 (各15分) ユネスコ国内委員会のASPとESDへの取り組み 小川真由美氏(文部科学省国際統括官付ユネスコ第二係長) ニュージーランド・スタディーツアー報告 中山博夫氏(目白大学助教授/同研修旅行事務局局長) ASPnet5カ国協同実践報告 伊井直比呂氏(大阪教育大学附属高校池田校舎教諭) 奈良市教育委員会「世界遺産副読本」改訂の取り組み報告 中澤静男氏(奈良市教育委員会学校教育課指導主事)
10:50~ 12:20	分科会 ESDをどう推進するか(104教室) ・五島政一氏(国立教育政策研究所) ・広島大学附属中・高等学校の実践[藤原隆範教諭] WHEをどう推進するか(105教室) ・田淵五十生氏(奈良教育大学教授) ・奈良教育大学附属中学校の実践[谷口尚之教諭]
12:20~	閉会集会 分科会報告 各担当事務局 閉会あいさつ 多田孝志氏(副実行委員長)
13:30~ 16:30	*フィールドワーク 同行解説: 大山明彦氏(奈良教育大学助教授) 山岸公基氏(奈良教育大学助教授) 東大寺(大山氏) 南大門~大仏殿~三月堂~二月堂~戒壇院等 興福寺・元興寺(山岸氏) 奈良町~元興寺~興福寺(国宝館・東金堂など) とともに奈良県文化会館にてReviewののち、解散